

フィールド風

(現場)からの

宮田守男

5月下旬、話題の農具川アヤマ祭りを鑑賞する。大町市の市道神栄町三日町線を走行している。「地域づくり」に頑張っているなど気になっていた場所だ。

会場の特注には、農具川環境美化委員会の栗林宏治会長さんが車の誘導で大忙し。内容を聞きたくて尋ねると「15年以上心血を注いで整備に当たった」顧問の猪又毅さんが詳しくと紹介される。「長野県に、この規模で植栽している所はない」と話される猪又さん。

野原に、この規模で植栽している所はない」と話される猪又さん。ドライバーとして、多くの名所を見聞しているから「案内できるのだらう。」

農具川は、仁科三湖の青木湖・中綱湖・木崎湖で繋がり、大町市東部を流れる一級河川。一時は、水質汚染

地域が創り出した舞台を地域活性化に結び付ける知恵が必要だと考えてみませんか

三日町から神栄町までの1800mの区間を5つの町会が活動して、5月中旬まで色鮮やかに咲き誇ったシバザクラを始め、現在500を超えアザレアと9000株以上のアヤマが咲き誇っている。

猪又顧問の話も興味深かった。「このアヤマは、中国が原産地で乾地を好み、渡り鳥が持ち帰った種で自生している場所が大町にある、そこからの移植が中心」、「農具川は一

級河川、高水敷や堤防敷に植栽することは、国の許可が必要」、「理解してもらうために、木々の植樹ではなく、花木の言葉にこだわった」とほほ笑む。

費用について尋ねると、日本財団やセブンイレブンの資金で賄ったと、巧みな財源確保の内情を教えていた。花はと尋ねるとアザレア。日本に自生していた品種が、江戸末期から明治時代にイギリスに渡り、オランダを中心に大規模な交配

がされ、現在のアザレアが誕生したのだが、日本に自生する植物を改良したため、日本に適していると考えられる花木だ。アヤマにしてもアザレアにしても外国人観光客にアピールできる内容に期待感を持ってしまふ。

しかし河川敷内の土

は、栽培に適していないことも事実、株を大きくするのは、植え替えも必要。当然費用も課題なのだろう。行政との関わりを聞くと、言葉を濁す。舗装されていない路を歩みながら、散策する楽しさ。

地元民が創り出した舞台に光を与える事が地域づくりに大切だと多くの人が考えてほしいと願っている。
(NPO法人信州地域社会フォーラム理事・白馬村森上)



住みよい故郷づくりが創り出した舞台は、訪れる人の心を温かくすると願う猪又さん、栗林さん